

注解『七十一番職人歌合』稿(一)

下 房 俊 一

凡 例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、序文から第三番までの注解を収めた。

一、最初に序文の【本文】および【語注】を置き、以下各番ごとに、【職人尽】『七十一番職人歌合』以外の各種の職人歌合、およびそれに準ずる資料、【本文】『七十一番職人歌合』の本文(翻刻)および絵(写真)、【語注】本文の語注、【絵】絵の略解、【参考】それぞれの職人に関する同時代(十五・六世紀前後)の各種の資料を挙げた。

一、【職人尽】について、

- (1) 前半に、『七十一番職人歌合』以前の職人歌合、すなわち『東北院職人歌合』(五番本・十二番本)、『鶴岡放生会職人歌合』、『三十二番職人歌合』、および飛鳥井雅康の『職人歌』から、該当の箇所を引いた。
- (2) このうち、前三者については、『新修日本絵巻物全集28』(昭和五十四年、角川書店)所収の、森暢氏による翻刻、後一者については、岩崎佳枝氏の「『職人歌合』と飛鳥井雅康」(『文学・語学』一〇六号、昭和六十年)所収の翻刻により、私に句読点を施した。
- (3) 後半に、『七十一番職人歌合』以降、幕末までにおける職人歌合やそれに準ずる資料から、該当の箇所を引いて、活字を落として挙げた。
- (4) これらの資料は、主として、『日本庶民生活史料集成30』別冊(昭和五十七年、三一書房)所収の町田和也

注解『七十一番職人歌合』稿(一)

氏他の翻刻、および、狂歌大観刊行会による『狂歌大観』本篇（昭和五十八年、明治書院）の翻刻により、私に用字法を変え、句読点や括弧を施した。

一、【本文】について、

- (1) 底本には、東京国立博物館蔵本（東博本）を用いた。ただし、東博本にない序文については、前田育徳会尊経閣文庫蔵本をもって底本とした。
- (2) 「◇」の後に挙げたのは、絵の中に書き込まれた、職人名および職人の話し言葉である。
- (3) 漢字は原則として現代通用の字体に統一し、適宜句読点を施した。
- (4) 底本以外の諸本との異同を脚注の形で示した。ただし、明暦板本には振り仮名および濁点が施されているが、これに関する異同については省略した。片仮名で「ナシ」としたのは、その箇所が当該本にないことを示す。校合に用いた諸本の略号は次の通りである。
 - 〔尊〕 前田育徳会尊経閣文庫蔵本（尊経閣本）
 - 〔白〕 宮内庁書陵部蔵新井白石旧蔵本（白石本）
 - 〔忠〕 静嘉堂文庫蔵藤原忠寄書写本（忠寄本）
 - 〔明〕 明暦三年谷岡七左衛門刊本（明暦板本）
 - 〔類〕 群書類従板本（類従本）
- (5) なおこの中、白石本および忠寄本は、歌・判詞と絵の巻が別々になっている。絵は、東博本の写真を用いた。

序文

【本文】

(東博本ニコノ序文ナシ)

哥―【類】歌

吾国―【明】吾邦【類】わかくに

通―【忠】【明】通ひ【類】かよひ
おろかなる―【忠】【類】をろかなる
和ければ―【類】やはらげゝれば

をのく―【巨】【明】おのく

恋と月―【忠】【明】【類】月と恋
出て―【忠】【明】【類】出して

興有ける―【類】興ありける

(尊経閣本)

をのく左右をわかちて哥を合侍けり。題は恋と月を出て、衆議にて判けるなるへし。いと興有けるにや。

【語注】

◎ 延享板本(延享元年、京都、野田藤八郎板)には、この序文に先立ち、次の序文がある。

出雲やえかきに事初りしより世々に国ふりのたえせずして、上中下の人まで思ふかきりをのへたのしふのみならず、いきとしいけるものの、また更にやまとことの葉にもるゝ事なし。ましていま四の時静なるにつけて此道猶しさかりなりき。それから中に、月と恋とを題して七十一番に方わけて職人哥合といへる書あり。いむさき何れの比の馬のかみのさためけん品とはさたかならねと、木の道のたくみよりすみなはをうちそめて、かたちのあらやすりをもこまかにことほり、かはらけうる深草の民、筏こく大井河のおのこすつくるたくひまであまりなく、心ふとの注釈を明らかにしつづけたる判の詞いとまめやかなり。しかのみならず、その虫はみたるすり本のものゝ給やうも古代になつかしきか、今はたうすらきかすかに成もてゆきて、人しれぬむれ木となれるをあたらしみ、ひきおこしふたゝひあらたにかなかきてえりとゝのふるも、いやとをなかくつたはりなは、なとり河のせゝにあらはれなんか。延享はしめのとし文月、鷗東の篁処禿翁 (印) (印)

注解『七十一番職人歌合』稿(一)

◎天地ひらけし時、さかほこのくたれりけるより「さかほこ」は、あま天の逆鋒さかほこで、伊邪那岐・伊邪那美二神が国産みのために天から差し下したといわれる玉で飾った銚。国の初めを象徴する。古今集仮名序に、「この歌天地の開け初まりける時より出来にけり」とあり、和歌は開闢以来の文芸と考えられていた。「歌は天の昔より起こりて、あらがねの今に伝はれり」(興義抄、序)、「大和歌は昔天地開け初めて、人のしわざいまだ定まらざりし時、葦原中国の言の葉として、稲田姫素鵝の里よりぞ伝はれりける」(新古今集仮名序)など。

◎道を玉ほことなつて「玉銚」は「道」の美称。「詞林采葉抄」に、『日本書紀』の国産み神話を引いて、「右ノ瓊矛(『日本書紀』では「天之瓊矛」)是レ玉杵也。天地人之始メ也。王臣ノ道ノ道タルコト、矛ヲ以テ始メト為ス。故ニ玉杵ノ道ト申ス也。此ノ心ヲヨマセマシケル、久方ノアメモリクタス玉杵ノ道アル国ソ今ノ我クニ 後嵯峨院御製」とあり、逆鋒が下ったことから道を「玉銚」という、との説があつたことが分かる。

◎よろづの道をたてたり「よろづの道」は、古今集仮名序の「世の中にある人ことわざしげきものなれば」を意識した言葉であろうが、今の場合、具体的には諸々の職能を指すと考えてよからう。「職人」という言葉は当時すでに手工業者を指すようになっていたが、当歌合に登場するような、広く商人、芸能民等をも含んだ諸職を意味する言葉としては、「道々の者」「道々の輩」「道々工」というように、「道々」、あるいは「諸道」といった言葉が使われていた(石田尚豊「職人絵の展開」〈新修日本絵巻物全集28〉、網野善彦『日本中世の民衆像』)。先行の職人歌合にも、「職人」の語は用いられずに、「みちくものものども人なみく」に参りて聴聞し侍けるに「道々の者ども心をすまして遊びける」(五番本東北院職人歌合、序)、「道々の輩どもあるは役に従ひあるは友に誘はれて」「むかし宮こにて東北院の念仏九月十三夜にあたりて諸道の歌合ありけり」(鶴岡放生会職人歌合、序)、「千秋万歳の能作は毎年正月の佳曲なれば、諸職諸道の最初に出て哥合の一番に進めり」(三十二番職人歌合、一番判詞)とある。すなわちここは、天地開闢以来さまざまな職業が起こった、と考えるのである。

◎ことに哥をやまとも名つて 先の「道を玉ほことなつて」と照応する言葉。諸々の「道」の頂点にあるものとして歌の道を捉えていることになる。つまり、職人が歌を詠むのは当然のことだというわけである。これも古今集

仮名序の「生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける」以来、公式的な思想であるが、それを文字通りに解したところに、当歌合の面目がある。なお、「やまと」のみで「やまとうた（和歌）」を意味した例については未考。

◎吾國のことわざ「ことわざ」は、人の當為一般を意味するが、古今集仮名序の「世の中にある人ことわざしげきものなれば、心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり」以降、特に和歌と結びつけて考えられるようになった。ここは、「大和歌の起り、……千早振る神代より始まりて敷島の國のことわざとなりけるよりこのかた」（古来風体抄）、「三十一字の歌は……我が國のことわざになむ侍り」（簸河上）と同様、我が國を代表する能芸というほどの意味。

◎神の道にも通、人の心をも和ければ 古今集仮名序に「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり」とあるによる。

◎金殿の光ことなるみきり 「金殿」は金で飾った立派な殿舎。岩崎佳枝氏は『七十一番職人歌合』成立年時考』（文学・語学）九六号、昭和五八年一月）で、二十三番左、翠簾屋の画中詞などを手掛りに、当歌合の成立時期を、明応九年（一五〇〇）十一月頃と推定され、「金殿の光殊なる砌」とは、後土御門天皇崩御の後、後柏原天皇の踐祚を指すのであろう、とされる。およそこの頃の成立と考えてよからう。

◎おろかなる草のむしろにも心をへけるあまり 「疎かなる草の筵」は、「金殿の光殊なる」と対照的に、粗末な住まい、すなわち、諸々の職人達の境遇を意味する。『三十二番職人歌合』序にも、「よき衣を着ざる商人も質を荷なへる童も、おのおの月に寄せ恋になずらへて、歌を合はせ心ざしを表すたぐひ度重なれり。ここに我等三十余人、賤しき身品同じきものから、その筵に臨みてその名を掛けざること、将来多生の恨みなり」とある。「心をのぶ」は「心を延ぶ」で、心をのびのびとさせること。応仁乱後の下剋上の世相にふさわしい言葉であるといえよう。同時に、「心（思ひ）をのぶ」は、「春の花の朝、秋の月の夕、思ひをのべ、心を動かさずといふことなし」（千載集序）、「その（やまと歌の）道盛りに興り、その流れ今に絶ゆることなくして、色に耽り、心をのぶるなかだちとし」（新古今集仮名序）とあるように、歌を詠む（述ぶ）ということに通じるものであった。なお、「延ぶ」は「筵」の縁語で、

「心を延ぶ」は、しばしば「筵」とともに用いられる語。「まどろまず仮寝の野辺の月を見て／草の筵も心延べつつ
〈道賢〉」（熊野千句、七）、「筵も濡れぬ仮臥の床／心をも延べぬばかりの帰るさに〈修茂〉」（河越千句、十）、「松風
を苔の筵に伴ひて／心も延べぬ秋の夜の床」（三嶋千句）、「恋しさの心も延べぬ独寝は九条筵も狹せばからぬかな」（当歌
合、八番右、筵打）など。

◎その道をかたとりて「かたどる」は、形を写し取ること。それぞれの職能にふさわしく歌を詠んで。

◎恋と月 忠寄本、明曆板本、類従本の「月と恋」の方が歌の順序に合う。なお、『東北院職人歌合』および「鶴
岡放生会職人歌合」の題は、月と恋、『三十二番職人歌合』の題は、花と述懐。

◎衆議にて判けるなるへし 『東北院職人歌合』の判者は「経師」、『鶴岡放生会職人歌合』の判者は「八幡宮神
主」、『三十二番職人歌合』の判者は「弁説上人」。これに対して、当歌合は衆議判だという。百四十二人もの職人達
が銘々に意見を述べ合ったら、どんなことになるのか。まさに「いと興有けるにや」というところであろう。この設
定は、七十一番という、かつてない大規模の職人歌合を「催し」た精神と通じるものである。ただ残念ながら、衆
議らしい面白さは以下の判詞からは窺えない。

一番 番匠 鍛冶

【職人尽】

〔五番本 東北院職人歌合〕二番 鍛冶・番匠

左

月にねぬやとくや人のおもふらんいつもたえせぬあひつちのおと
あふ事はやかてたかねのはかみ草いさくは人をおもひきりてん

右

すみかねのなをりをたゝす身なれともかたふく月にかうはりそなき
あはむとは下かためせし君なれとまたはんさくのかひをする哉

月

左、なたらかに侍。たゝし大かたのやとならひによまれたり。右、詞つゝきよろしく侍。かたふく月とよまれたる、いかゞ侍覽。月の哥をはさかりによむへきとぞ、ふるき哥合にも申たる。これかれなそらへて持にや侍らん。

恋

左の哥、なたらかに侍。たゝし、いさゝは人をおもひきりてんと、心にまかせられたるこそみゝにたちて侍れ。恋ははてなしとこそふるくもならひ申事にて侍。聞にくゝ侍。この心はうすく侍れと、いまずこし左はまさると申へし。

〔十二番本 東北院職人歌合 三番〕

左 鍛冶

月にねぬ宿とや人のおもふらんいつもたえせぬあひつちのおと

右 番匠

すみかねのなほきをたゝすみなれともかたふく月にかふはりそなき

左哥、こと葉のつゝきおしこめてなたらかに侍り。月にねぬ宿とや人のおもふらんとて、頻にさもなきよしを陳せられたる、無下に心のうちすかすや侍らん。右、かたふく月によまれたるこそふかき難にて侍れ。月を題にえはさかりによむへき也。但月をゝしまれたる心さし、すてかたし。仍右為勝。

左

我恋はなましかたなかねあまみおもひきれともきられさりけり

右

きりなかずなけしのこくちすちりつゝいかにおせともあはゝこそあらめ

左、なまし刀のかねあまみ、誠にさもと聞え侍り。右、たゝなけしのこくちあはぬはかりにて恋の心さしに聞えす。これを落題とは申也。仍以左為勝。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕六番

かち

うらめしや人の心のあらやすりひかきめにたにのそかれぬかな

大工

をしなをすたくみもいさやすみかかねにかけすむ月のかたふきにける

〔伝馬丸光広作 職人歌合〕三番

鍛冶・番匠

ましてしばし隣の鍛冶の槌の音見残す夢の先駆くる間を

人の家墨曲尺当てて見

る大工我が身になればなど歪むらん

〔吾吟我集〕

寄番匠恋

角らしき人の堅気の憂節をまろく削らん番匠もがな

寄鍛冶恋

鉄も人の鍛へば和らぐになど練れ合はぬ君の一徹

職人

安らかに軒を伝ふて家作る大工をいはば蛛のいとなみ

思ひしみて思ひ切るにも切られぬは身より出せる錆刀かも

太刀

抜くとても我が目の鞘をはつさずは何の用にか太刀の切先

〔古今夷曲集〕職人歌合の中に鍛冶の恋の心を

お床しとさつと一筆我が職の鞆の風の便り求めて

〔訓蒙図彙〕工 たくみ。匠。

俗ニ云フ大工、木工也。匠人、木匠、並ビニ同ジ。工匠亦通用ス。諸工ノ總名也。

鍛、俗ニ云フ鍛冶ト鍛冶ト字相似テ誤レ

り。工、小治、鉄匠、並ビニ同ジ。〔長崎一見 職人一首 鍛冶・大工 夜屋も分かず鞆の風荒れてあたら火花の散るぞ悲しき

散りぬるは鋸屑と家校立つるも花の椽柱かな 左の歌、散るといへば火花まで惜しまれしとぞ、大分槌のおとなしやかに聞こゆ。

右の歌、花袋の飛驒の匠に口広しと言へば言はるるとて、鋸屑と見立てらるることあまりのことにや。左勝に定め侍る。〔後撰夷

曲集〕番匠 番匠はおとなごとくも石つらの並よく出来て水を盛りけり。寄刀恋 恋に心乱れ刃がつかの間も離れがたなや君

が腰本〔銀葉夷歌集〕番匠恋 番匠も君をば恋に墨壺のいとやさしくも書き口説く文 女房のきぶりわろきを思ひ切り引いて鋸

と言へる番匠。番匠童さいいちちをもて打ちけるは普請の用に立たん匠か。鍛冶恋 鍛冶屋まで恋せぬやうは粗金の

鈍の始めも当世もなほ 変はらじと誓ひに鉄を打つ槌のちんからころり死なばもろうとも 離別せんいやのかちやれとやかくと思案

半ばの子は相の釘。鍛冶 葦囊の口あるゆゑか打物の飲むほど切る焼きの湯加減 つかからこと打つは異国より渡れ

る鍛冶が槌の拍子か〔人倫訓蒙図彙〕大工 天笠より始め、筑紫日向の橋の京に宮造りし給ふ時始ま

れり。其後聖徳太子加藍御建立の時、飛驒の内匠、是大工中興の祖なり。鍛冶 鍛冶也。和俗誤てかちと読む也。天国神息

始りの由。刀鍛冶 刀鍛冶、諸国に名家多し。京にては日本鍛冶惣匠伊賀守藤原金道、和泉守金道、近江守源久道、丹波守

吉道、越中守正俊、信濃守信吉、何れも菊の御紋を銘に切る也。(狂詠犬百人一首) 番匠童又介、削りきなき堅木に袖をすりこすり直ぐの松の木歪ませじとは(今様職人尽百人一首) 大工 軒の桁板庵ぞ穴の鑿を遥み我が弟子どもの精を出しつづ「七兵衛、削らぬか」「柄を引きませうか」「逆目が立つぞ。木端を拾へ」／鍛冶屋 足曳の相槌音のちんからりながく「夜を明かす金槌」「きつふこの鉄は鈍つたぞ」「さあ〜精出せ〜」「これから煙草と出ようぞ」(彩画職人部類) 工匠 日本紀ニ、神武天皇元年、帝宅ヲ樞原ノ宮ニ經リ始ム。此ノ時、天ノ明ル日ノ命、工匠ヲ掌ルト。莊子ニ云ク、野人聖ヲモツテ其ノ鼻端ニ漫リテ蠅翼ノ若クシテ、匠石ヲシテ之ヲ斲ラ使メ、斤ヲ連ラシテ風ヲ成シ、聖ヲ尽シテ傷ツカズ。／鍛冶 周の世の桃氏を始め、我が朝には崇神天皇に起る。文武の御宇に天國あり。劍の諸刃を二つに割る。これを刀といふとぞ。其より代々に伝へて諸國に良工あり。小鍛冶宗近を始めとして、數ふるに何指をもつてせむ。(職人尽発句合) 番匠・鍛冶 雪の花散るや榎の手斧屑 梅鏡ひ柳芽をはるちかき殿作りに鳥糞を散らす番匠が句のたくみなりや。「大寺の造作は暇がいで、建て栄へのするものよ」相鏡や冬の雉子啼く粟田口 粟田山の禁にありし鍛冶何某が名譽の鐘の音を雉の声に聞きなしたる。勝劣いづれと分きがたきを、稲荷の神の告げによりて、右為勝。「齋祭の休みも近くなりたり」(職人尽狂歌合) 番匠・鍛冶 家桜木組の外に番匠の鉋を使ふ花の短冊 花もさく物と眺めん刀鍛冶鑽打ちしぞ価千金 左、匠の鉋使ひおかし。右、四の句聞きにくし。左を勝と定むべくや。／番匠・鍛冶 花に酔ひ酒に酔ひたる匠こそ聞きし左の基五郎なれ 閑物のしづ心なく鍛冶は見ん花に嵐を打ち上ぐる時 左右とも興あり。同じ位なるべし。／鍛冶・番匠 麓から見積りをして吉野山花の盛りを日割番匠 蓬萊の玉の枝かと打ち見つづめづるや花の鍛冶工ども 左、飛驒匠よろしけれど、かのいでき親と言へりし竹取りの昔話には及ぶべうも侍らず。／鍛冶・番匠 番匠の持つ墨壺の糸桜下げ振り見する枝の短冊 永き日を鍛冶も咄の相槌にうち眺めたる花の真盛り 左、三四の句おかし。心ある匠と見ゆ。右、二の句苦しげなり。左全き勝に侍るべし。／番匠・鍛冶 松は板樺は柱盛りなる桜をむねとめづる飛驒人 汲む酒にほどを忘れて呑むとも吹草の風も花に厭へり 左、おかしき作意感少なからず。右、結句厭へりとおるはいかゞ。すべて過去と現在とは心して詠むべきことなるを、此の頃は安りなるもあまた見ゆ。厭へりと言ひては過ぎ去りしことなり。かかる所は現在の詞にてこそ言ふべけれ。左勝にて侍るべし。(近世職人尽絵詞) 大工は小工に對しての名にして、棟梁は都料匠なるべし。また飛驒の工といへるも一人のことにあらず。昔飛驒より京師に上りて結番せしゆゑ、番匠の称ありとぞ。今柱立にいろはの字を書くことは高野大師の立てられし時より始めれりと、頼阿法師の高野日記には記せり。「昼休みにちと削らばや」「鉋は鈍きがよく候ぞ。都の大工は敷居を削るに三日手放さずと言ひ伝へて候ぞや」「すべて軒妻切るほどむつかしきものはなし。古き諺にも、堂宮建て、軒妻切りて半大工、と申候と」／鍛冶を俗に鍛冶といふは訛なり、と和名抄にも見えて、古くよりの訛なり。昔千将といふ劍は直焼、莫邪は乱焼なりしこと、吳越春秋に出たり。「すべて焼き刃を渡すは埴をもてすと言ひ伝へり」(略画職人尽) 人の巢を作る大工の腹よりも糸引き出す墨壺の蜘蛛 (宝船桂帆柱) 番匠 鋸のめでたき御代の例として今日や子日の松の木を引く「もふ昼だらう。大分ほぞが外れて来た」／鍛冶 栄え行く運は天からてんからと鉋を延ばすや鍛冶の生業「鍛冶

屋は居ながら飯を炊く。てんからく」(難波職人歌合) 十三番左 大工 門に出て待つ妻よりも夕月の顔を見るこそ身は嬾しけれ 右の方人云、京わらはの詞に、匠の妻の夕化粧ゆづり、と云へることも思ひ合はされて、いみじき鳥詩歌と云ふべし。左方答、万葉集の歌に、咲まんかよびき行きてはや見む、と云へるよりも、夕月の顔を見て早く憩はまほしく思ふ心なるをや。判に云、左の歌、家に待つらむ妻の顔よりも月を早く見まほしと云ひて、手業を運ぶことを含まれたるは、げに名にし負ふいみじき匠と云ふべきなり。……この番はともにいとくめでたければ、持とこそ云はましか。／十七番右 鍛冶屋 心なき岩木の山の鉄もどくる習ひを人は知らずや 左の方人云、さる所の鉄ならでも溶くることは同じければ、初二句は不用なり。ことむつかしく云はでもあるべし。右方答、岩木を心なき物にいふは常なり。また、その岩木の山の雫とも云ひ続けるは、恋の歌の常なり。さればこの歌は鉄の溶けがたき物なるよしを、いよく強く云はん料に出せるなり。判に云、……右の歌、心なき岩木の山より云ひ下されたるにて、いかばかりの勢をか増しつらむ。左もわるからねど、なほこよなう勝りたり。

【本文】

一番

左

をしなをすたくみもいさやすみかねに

さけすむ月のかたふきにける

右

軒あれてふるきかちやの太郎つち

ふりさけみれば月のさやけさ

左の歌、さけすむ月、とよくつゝけたれとも、

哥合には、かたふく月、あやなくきこゆ。

右の哥、太郎つちふりさけみれば、といへる

(コノ前二)「尊」「白」「忠」歌合 題 月 恋「明」七十一番

歌合 題 月 恋「類」題 月 恋

一番 左「明」左 一番

をしなをす「明」をしなほす たくみ「類」工

かたふきにける「明」「類」かたふきにけり

右「忠」ナシ

ふるき「類」古き 太郎つち「類」太郎植

さやけさ「類」さやけき

哥合「類」うた合

哥「類」うた ふりさけみれば「類」ふりさけ見れば

も月をほめたり。まさると申へけれども、一番
の左なれば、なすらへて持と申へし。

くれことにひとりふし木のあらつくり

いつておの目のあはむとすらん

うらめしや人のこゝろのあらやすり

ひかきめにたにのそかれぬかな

左右ともに、ておのめ、ひかき目、とよめり。お

なしほとの哥さまなるへし。猶持とす。

◇ ◇

はんさう

我らもけさは

相国寺へ

又めされ候。

暮てそ帰

候はんすらむ。

かち

京こくとのより

うちかたなを御

あつらへ候。大事に候

かな。見らるへきと。



注解『七十一番職人歌合』稿(一)

ひとり「類」独

ておの目「類」てをのめ

こゝろ「類」心

かな「類」哉

ておのめ「類」てをのめ ひかき目「類」ひかきめ

はんさう「尊」はむさう「白」類「番匠」忠

我ら「尊」類「我」我も「忠」明「我」けさ「白」今朝

又「白」ナシ

帰「白」類「かへり

かち「白」類「鍛冶」忠「鍛冶」明「閑地

京こくとの「白」京極殿「類」京こく殿

うちかたな「白」うち刀「明」たちかたな 御あつらへ候

「白」御詠候 大事に候かな「白」ナシ

見らるへきと「白」ナシ「類」かゝるへきと

【語注】

◎ 歌合の第一番、殊にその左は、最重要の人物を配する慣習であった。『東北院職人歌合』の一番は、医師と陰陽師、『鶴岡放生会職人歌合』は、楽人と舞人（この場合、放生会との関連があらう）、『三十二番職人歌合』は、「千秋万歳の能作は毎年正月の佳曲なれば、諸職諸道の最初に出て、歌合の一番に進めり」（一番判詞）として、千秋万歳法師が一番の左となっている。番匠と鍛冶はもともと早く專業化の進んだ職人で、「世間の鍛冶、番匠らがその道を伝えることは……」（一言芳談）のように並称され、ともに職人の中でも最高級の技術者と考えられていた。（後述『日本教会史』参照）

「番匠」とは、もと律令制で大和、飛驒などから交替で木工寮に召された大工で、「番上の工匠」の意。「大工」の語も本来、律令制の職員の名であったが、平安時代から室町時代にかけては、特定の貴族や寺院に従属して建築、造船などに携わる、技術集団の長を意味し、「壁大工」「檜皮大工」「畳大工」「船大工」などの語があった。一方で、戦国時代以降、「大工」単独で現代語の「大工」と同じ意味を表すようにもなった。

「かぢ」は、「かなうち（金打）」の転訛。鍛冶には当時、刀鍛冶と農具鍛冶とがあったが、ここは、絵および職人の話し言葉から、刀鍛冶であることが明らかである。

◎ をしなをす…… 『飛鳥井雅康 職人歌』六番右は、第四句「かけすむ月の」。五番本『東北院職人歌合』二番右（または十二番本『東北院職人歌合』三番右）番匠の月の歌と同様の歌。

◎ をしなをす 形の歪んだり曲がったりした物を矯正する。「Voxinaoxi. su. oia. ねじれ曲がった物をまっすぐにする、または、きちんとしていないものを整える」（邦訳日葡辞書）、「板びさしの端の出たりしを、御杖にてたゝき入られて、……（コノ坊ノ）破れたらん所をば見付次第にか様に押し直すべし」（実悟記）。

◎ たくみ 工夫。大工のことを「たくみ（工・匠）」とも言ったので、これを掛ける。

◎ すみかね 大工の使う墨と曲尺。転じて規矩術。「スミガネ」と読んで曲尺に同じとする説もあるが、伊京集に「規」、書言字考節用集に「黒曲尺」、日葡辞書に「Sumi cane」と、いずれも清音。また、「墨カネヲウツタヤウニス

クメニ云テ、切事情事ノ是非ヲキツカト明ニシタソ」(史記抄十、廿四ウ)、「案繩墨トハ、トコハトコノトヲリト墨カネヲアテタ様ナソ」(同十三、五十オ)、棟梁□トニハナラヌ木ヲ莊子ニモアルソ、大ナハヘウセウトシテ、ハレタヤウテ、スミカネカアテラレヌ、アテヤウカナイソ、小イハユカミスチツテナラヌソ」(毛詩抄十一、十五ウ)、「一人ノ家ノ中ニ墨金ヲ以テ作タ家ハ外ニモスミカ有ソ、其如ク内ニ徳カアレハ外マテヨイソ」(同十八、六ウ)「外相ヲミテ内ノ徳ヲ知ヌソ、墨金ヲアテ、スレハ外カユカマイテカトカ有ソ」(同十八、七オ)「Suni cane 大工のインク〔墨〕と直角に曲がったものさしと。『Suni caneno atsuru. 計るためにインクをつけ、直角に曲がったものさしをさし当ててみる』(邦訳日葡辞書)等の例からして、墨と曲尺、また墨と曲尺をもって規矩すること、と解すべきであろう。

◎さげすむ 「さげすみ〔下墨〕」を動詞化した語。錘を用いて柱などが傾いていないか調べることを。墨壺を錘に代用したことから、このようにいう(村松貞次郎『大工道具の歴史』)。こゝは、月が中天にあつてほしいと願つて高度を測つてみるのだが、あいにく西に傾いてしまつてゐるのである。「下げすむ」に月が「澄む」を掛ける。

◎太郎つち 弟子が両手で持つて使う大槌。相槌。柄の長さ三尺余。師が小さな槌で打つのと交互に弟子が打つ(山本唯一『中世職人言葉の研究』)。「Tarozuchi 鍛冶屋の使う大きな鉄槌」(邦訳日葡辞書)。

◎ふりさげみれば 「振りさげ見る」は、はるか遠くを振り仰ぐこと。「天の原振りさげみれば春日なる三笠の山に出でし月かも(安倍仲鷹)」(古今集、九、羈旅)の歌のように、本来雄大な自然を想起させる言葉であるが、こゝは、古き鍛冶屋の家の中から荒れた軒を通して月を覗き見るのである。あえて大袈裟な言葉を用いたところが面白い。太郎槌を「振り」と掛ける。

◎哥合にはかたふく月あやなくきこゆ 「花の題に落花をよみ、月の題に暁の月をよむ事あるべからず。歌合にはしかるべからず」(詠歌一体)、「限りありて入らん月をもちかせん山の端までは曇らずもがな(判詞) 上句は落月にやと見え侍る。末句は東峯に出るより西山に傾くまで曇らずもがなと、たゞ大方の事と聞え、当時月明きには見え侍らず」(治承三年十月十八日右大臣兼実家歌合)などに見るように、歌合の月の歌は、月の盛りを詠むべきものとされていた。『東北院職人歌合』の番匠の同想の歌に対しても「傾く月と詠まれたる、いかが侍らん。月の哥をば盛

りに詠むべきとぞ古き哥合にも申たる」(五番本)、「傾く月に詠まれたるこそ深き難にて侍れ。月を題に得ては盛り
に詠むべきなり」(十二番本)と同様の指摘がある。第五番檜物師の月の歌「汲みたむる桶なる水に影見れば月をさ
へこそ曲げ入れてけれ」に對して、「月を曲げ入ること、入る月を願ふに似たり。少し心なきにや」と評するの
も同趣旨。ただし、傾く月を詠んでは絶対にいけなかないかといえ、必ずしもそうではなく、たとえ、四十五番右、鞍
細工の月の歌「夕まぐれ山がた近き三日月の曲がりながらに入りぬべきかな」は、入る月であり、三日月という点で
も異例であるが、何ら難ありとはされず、「詞続きやさし」として勝を与えられている。こゝは、「歌合に傾く月はよ
くない」という公式を表明すること自体に意味があつたのだと思われる。(次項参照)

◎「一番の左なればなすらへて持と申へし」「一番左歌は可優之由、故人所申也」(袋草子)、「左の歌、よろしき
はあらねど、一番の左なるによりて、勝と定め申す」(治承三年十月十八日右大臣兼実家歌合、一番判詞)、「殊の外
ならぬ限りは左を勝たすることなれば、左を以て勝と為す」(永縁奈良房歌合、一番判詞)、「一番の左は多くは勝つ
ことに侍れども、これはいと目驚くものにはあらず。……しかれども一番の左にことを寄せて、ことさら勝劣を決
せざるなり」(遠島御歌合、一番判詞)のように、歌合の一番は左を勝とする(悪くても持)という慣習であつた。
ただし今の場合、左歌の「傾く月」は確かに致命的な欠点と言いつるが、こゝは、左右の歌の實際の優劣よりも、上
のような歌合の慣習に倣ふことによつて、いかにももつともらしい歌合に見せかけるための処置であつたのだ、とい
えよう。「一番の左歌、負に定め侍ることもその例なきにあらざれば」(永正五年狂歌合、一番判詞)、「一番の左とい
ひ、……勝と定め侍りてむ」(調度歌合、一番判詞)、「且ハ歌合ノ例ニ任セテ左ヲ以テ勝ト為ス」(玉吟抄、一番判
詞)と、狂歌合にこのことの指摘がことさら多いことは、一般の歌合以上に歌合の典型を求めた結果ではなからう
か。『三十二番職人歌合』第一番の判詞にも、「歌合の一番の左は勝の字おほむね定まれるやうなれども、この番にを
きては持とつけ侍るべし」とある。「をしなをす……」と同想の歌は、すでに『東北院職人歌合』にあつて、判詞で
当歌合の場合と同様の欠点を指摘されており(前項参照)、こゝはほとんど『東北院職人歌合』の剽窃といつてもよ
いほどである。しかし『東北院職人歌合』においては、その歌の出でくる番は第二番(五番本)または第三番(十二

番本)で、かつ左が鍛冶、右が番匠であった。しかも十二番本の場合は、その歌は欠点を指摘されたにもかかわらず、結果的には「月を惜しまれたるころざし捨てがたし」として勝と判定されている。それを当歌合では、両者の番を第一番に据え左右を入れ換えて、番匠に対して一番左という最重要の地位を与えたわけである。番匠や鍛冶の地位については前述したが、番匠があえて一番左を襲うことのできた理由の一半は、彼の歌が、傾く月を詠むという、歌合の歌としては致命的な、従って極めて分かりやすい欠点を持っていたからではなからうか。このような致命的な欠点をすかさず指摘すること、その一方で「一番の左なれば」という理由で持という判定をくだすこと、このいずれもが一般の歌合において、いかにも「ありそうな」ことなのである。なお、『七十一番職人歌合』の直接の元と考えられる『飛鳥井雅康 職人歌』(岩崎佳枝氏『職人歌合』と飛鳥井雅康)においても、鍛冶・番匠はなお第六番に置かれていた。

◎ひとりふし木 「ひとり臥し」と「節木」とを掛ける。「節木」は節の多い下等な木材。「荒作り」だから節木で間に合わせるのである。

◎ておの目のあはむとすらん 「ておの目」は「手斧目」で、チヨウウノメと読む。チヨウウナメの転。室町時代中頃まで日本には、製材用の縦挽きの鋸(大鋸)はなかった。角材や板は、斧や楔や割鑿を用いて木を割り、表面を手斧や槍鉋で仕上げた。大鋸の出現に伴って台鉋も普及し、精巧な工作が可能になった(大工道具の歴史)。手斧は角材や板の表面をはつって平らにするJ字型の工具。その刃の跡が「ておの目」。「ておの目のあふ」とは、手斧がけが思い通りに出来ることを言うのであろう。恋人に「逢ふ」を掛ける。なお、手斧は、墨壺と並んで番匠を象徴する道具で、仕事始めには「手斧始め」という儀式が行われた。

◎うらめしや…… 『飛鳥井雅康 職人歌』六番左に同じ。

◎人のこころのあらやすり 「人の心の荒」し、と「荒鑿」とを掛ける。「荒鑿」は目の粗い鑿か。

◎ひかきめ 檜垣の目か。「せめて檜垣の目越しにでも覗いてみたいものだが、それさえも出来ない」の意か。「引搔目」を掛ける。「引搔目」は、鑿などで削った跡。

◎我らもけさは…… 右の鍛冶の言葉に応えたものであろう。左右の職人で応答する形になっているものには、この他、十八番饅頭売と法論味噌売、三十四番医師と陰陽師、三十五番米売と豆売などがある。

◎我らも 白石本「我も」。尊経閣本、類従本「我々も」、忠寄本、明曆板本、「我々も」と読めるが、「ミ」「ム」と「ら」とは区別しきたい。因みに、菱川師宣の『和国諸職絵つくし』は「われくも」「われわれは、ことのほか酔いて、顔が赤くなりて」（藤袋の草子）、「Varera. われわれ、または、私」（邦訳日葡辞書）、「Xiqi. 代名詞のあるもの、たとえば、『私』を意味する Varera や Xexxa などに連接する助辞。それは、自分自身を卑下して、ちよつと『私』のような者』などと言うような意味である」（同）のように、「われわれ」「われら」ともに単数の自称代名詞としても用いられたが、十八番右、法論味噌売、三十四番右、陰陽師、三十五番右、豆売、六十五番右、法華宗、六十七番左、比丘尼、同右、尼衆の話し言葉、および尼衆の歌に、諸本多く「我ら」「われら」「我等」とあるので、今それに倣っておく。「われら」の「ら」は、人を表す名詞（代名詞）について謙遜などの気持ち添える接尾語。

◎相国寺 京都五山の一。現京都市上京区。臨濟宗相国寺派の大本山。永徳二年（一三八二）、足利義満創建。開山、夢窓疎石。応仁元年（一四六七）、東軍の陣となり、西軍の攻撃によって全焼したが、その後文明五年（一四七三）から再建が始まり、文明末年（一四八七）には本格的な工事が行われ、永正年間（一五〇四～二一）には旧観に復した。「相国寺へ又めされ候」は、この相国寺再建当時に反映するのであろう。

◎めされ候 「候」は「ソウ」「さふ」「さう」「そふ」または「そう」と読むべきか。「ソウ」は「さふらふ」の転訛で、中世以降の口語で、補助動詞ないし助動詞として多く用いられた。ただし、本歌合の職人の話し言葉では「候」系の語は頻出するが、仮名書きの例はほとんどなく、確実なこととは言えない。ただ、「播磨鍋買はしまへ。釜もさらうぞ」（類「さふらうぞ」）。ほしがる人あらば仰せられよ。弦をもかけてさう」（六番左、鍋売）、「髭のあるは家の恥にてさうぞ」（十五番左、蛤売）、「御用やさふらふ」（四十一番左、牙脛）の例に倣って、取り敢えず、本動詞の場合には「ソウロウ」、補助動詞ないし助動詞の場合は「ソウ」と考えておく。ただし、次の「暮てそ帰候はんすらむ」の「候はん」は「ソロはん」であろう。「ソロ」は同じく「さふらふ」の転訛であるが、「ソウ」よりは古い言葉。

◎暮てそ帰候はんすらむ 『犬つくば集』に、「今日も暮ると帰る番匠／山寺の入相の鐘を腰にさし」とあるように、仕事の性質上、番匠は日が暮れると早々に仕事を終えて帰るものであった。

◎京こくとの 京極氏のこと。京極氏は近江の守護で、飛弾、出雲、隱岐三国の守護をも兼ね、室町幕府の四職家の一として勢力を誇っていたが、文明二年（一四七〇）持清の没後、嫡孫高清と庶子政経との間で内紛が起り、これに伴って、家臣家の分裂、六角、土岐、斎藤氏との対立抗争が相次ぎ、明応二年（一四九三）政経が、八尾城に退去するまで続いた（文明の内訌）。京極氏はこの一連の抗争で急激に衰退することとなった。なお、明応九年（一五〇〇）頃は政経の子材宗が高清と争っていた。

◎うちかたな 明暦板本は「さちかたな」。これでも意味は通じるが、「さ」は「う」の誤りであろう。「打刀」は室町時代に流行した、刃を上にして腰に差す刀。近世の普通の腰刀の原型。南北朝時代までは刃を下にして佩く太刀が主流であったが、室町時代になって戦法の変化（騎馬の射戦から徒歩の集団戦へ）に依りて、即戦力に勝る打刀（刃を上しているから、刀を抜く動作と相手に切り付ける動作が同時にできる）が普及した。室町時代末期には太刀の佩用は全く廃れ、打刀に脇差（小型の打刀）を添えるのが普通となった。本来ただ「刀」と言えば一般に短刀を意味し、それは突き刺すための武器であったので、それと区別して、打ち付けて切る刀という意味で「打刀」と言った。（佐藤貫一、『日本の刀剣』）

◎見らるへきと 類従本「かゝるへきと」。前の「かな」から続くか。伊勢貞丈の『職人尽歌合詞書の内難解』には、「かなかゝるへきと 本に、かな見らるべきとあり。かなあちをこゝろ見るといふ事なるべし。ためし物をして見る事なるべし」とあるが、未考。なお、「べきと」に似た言い方は、二十九番右、沓造の言葉にも、「鞆沓ははだかなるはわろきと」とある。

【絵】

番匠は折烏帽子、直垂、袴姿に帯刀。手に持っているのが手斧。その前に、曲尺、墨壺、鑿、槌を置く。墨壺から墨繩が出ていて、その先に付いているのは、軽子という、墨繩の端を木材に固定するための部品。明暦板本、類従本

は、この墨繩と輕子を落とす。

鍛冶は同じく折烏帽子、直垂、袴。刀は不明。右手に鎚、左手に鉄箸かなしばし。前に鉄床かなとこ（鉄敷かなしき）。刀身をこの上に置き、鉄箸で挟み持って、鎚で打ち鍛える。手前にやや小型の鎚と、刀身の入った箱。

【参考】

○ 衣打つ槌の響きに日は暮れて

真金まがね焼くなり太刀作る人 日晟

（享徳千句、四）

○ みかきたふ鍛冶が所の煎り豆に老いの齒金もあらはれにけり

（再昌草）

○ 一寸二寸にかがむ冬の夜

番匠のかねのごとくに身は冷えて

（犬つくば集）

○ 番匠の遁世したるなりをみよ

さいづち頭剃りぞ住びぬる

額に残る斬うろさかやき

（同）

○ さて弁慶思ふやう、……かくいさかひをせんには太刀刀なくては叶ふまじとて、三条の小鍛冶がもとに行きたくしけるは、「これは右大臣宗盛公の御使ひにて候ふ。太刀を四尺六寸、刀は九寸五分、同じく二尺一寸の打刀、この分、急ぎ鉄かねを改め打ちて進上あるべし。やがて奉行には某参りたる」とて、守り詰めてこそ打たせけれ。

（べんけいごうし）

○ 童男ちゆうなん壇の上にあがり、童男壇の上にあがつて、宗近に三拜の膝を屈し、さて御剣みつるぎの鉄かねはと問へば、宗近も恐悦の心を先として、鉄取り出だし教への鎚を、はつたと打てばちやうと打つ、ちやうちやうちやうと打ち重ねたる鎚の音、天地に響きとおびたたしや

（謡曲、小鍛冶、謡曲大観による）

○ こなたのいよく大名にならせられて、御普請のなされう御瑞相に、番匠の音が致す。くわたくくわつたり。

（虎明本狂言、財のつち）

○番匠屋の娘子の召したりや帷子、肩に番匠箱、腰に小鑿、小手、斧、搔植さいぢや鋸のこぎり、鑽きり、忘れたりや墨すみ、裾に鉋屑すまじ吹きや散らいた、ばつと散らいた、和女わぢよに名残は惜しけれどもよ、浦や瀬戸の手ぐり舟が急ぐ程によ、ホウイ頓て戻もどる

(保教本小舞、番匠屋)

○してへなに〜栗田口の名尽しの事、ト云テ、藤林、藤馬とて兄弟あるべし、とあるが、いづれの流れぞ、ト云。へ其ノ通り云。アトへ藤馬丞の流れじや、ト云。へ其ノ通り云。してへ藤馬丞は惣領なり。殊に重宝じや、ト云テ、鉦かね元黒き事第一たるべし。黒いか問うて来い、ト云。へ其ノ通り云。アトへ常に縺子の脛巾を致すによつて、随分黒うござる、ト云。へ其ノ通り云。してへ是は誠に黒からうト云テ、してへいかにも刃強たるべし、とある、ト云。へ其ノ通り云。アトへたゞ今お前で岩、岩石なりとも噛み割つてお目にかけう、ト云。へ其ノ通り云。してへ強い歯じや、ト云。してへいかにも古身たるべし、ト云。アトへ生まれてこのかた湯風呂を致さぬほどに、随分古身であらう、ト云。してへこれは古身であらう。さりながらむさいことじや、ト云。してへ両銘確かにあるべし、とある、ト云。アトへ上京に姉があり(娘あり)、下京に妹が一人ござる(これにも女子あり)ほどに、これも両姪でござらうか、ト云。へ其ノ通り云。してへこれは疑いもない両姪じや。両銘は出来物なり。(天理本狂言、栗田口)

(田植草紙)

○畠山六郎殿の差いたる太刀にこそな、千両ばかりの金はかかりたり、刀には仁王三郎、太刀にわ備前兼光、六郎殿の剃刀かみかはゑその突き折れ

(同)

○われらの家屋は、石と石灰で(作られる)。彼らのは、木、竹、藁、および土で(作られる)。

(日本覚書、六、松田毅一、E・ヨリッセン『フロイスの日本覚書』(昭和五十八年、中央公論社)による)

○われらの(家屋)は、地下に基礎がある。日本のは、それぞれの柱の下にただひとつの石がある。(その石はみな)地上である。

(同、六)

○われらの大工は立って仕事をする。彼らの(国の大工)は、おおむねつねに坐って仕事をする。

(同、六)

○ヨーロッパでは、大工にも〔その〕雇人にも食事を出さない。日本では、仕事場に対してのみならず、(たとえ食事を供したとて)何もしてくれない(大工の)若者に(さえ)食事を出す。

○われらの手斧は、大きく、幅が広く、多くの用途がある。日本人のは(それから見れば)玩具のようなものである。(同、六)

○日本人の間では、あらゆる技術者のうちで、この技術〔建築術〕を身につけた者が最もすぐれた者とされ、彼らと武具の鍛冶工との間に抗争が見られる。従って、これは他の技術のように低級な賤しいものではなくて、王国全土にわたって、これを本業とする者が無数にいて、それらは弟子をかかえて仕込んでゐる。……彼らはわれわれの所〔ヨーロッパ〕にあるあらゆる種類の工具を持っているが、その工具ははなはだ優秀で良質のものである。たとえば手斧、鉋、目盛メシヤによって分けられた直角定規エスケートラで、この目盛はすべての単位の中で最小のものである一ポント〔分〕から始まるが、それは数学上のグラウにはほ対応する。……このようにしてこの直角定規であらゆる寸法を整える。なお彼らはまたさまざまな鑿、鋸、錐、その他大変すぐれた造作に使う道具を持っているが、それらはわれわれの持たないものである。

(日本教会史二―三、土井忠生他訳『日本教会史』(昭和四十二)四十五年、岩波書店)による)

○この技術〔建築術〕の次に置かれるのが、鉄を加工する技術、ことに日本人が大いに誇りとしている攻撃用武器の技術である。そしてこの技術は品位や〔世人の〕尊敬という点で前述の技術と相競っており、あらゆる職人のなかで首位を占めるのはこの技術であるか、それとも木造建築のそれであるかということについて大論争が起きている。

(同、二―三)

二番 壁塗 檜皮葺

【職人尽】

〔十二番本 東北院職人歌合〕 六番右 壁塗

しらつちをかさねてしるき月と見てもろこしまてのむかしをそしる

右哥、五文字耳にたちて侍れとも、漢家三十六宮の心を存られたり。証文たしかなるにつきて勝とすへし。
しのへともしたちよわなる古かへのたゝこほれなる我なみたかな

……右、たゝこほれなる我涙哉とよみたる姿、見所有ておもしろく侍。仍持たるへし。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 五番右 さくわん

ふる里のかへのくつれの月影はぬるよなくてそみるへかりける

〔伝馬丸光広作 職人歌合〕 六番右 壁塗 窓際の手際を思ふ壁塗はこてを枕の夢の内にも〔長崎一見 職人一首〕七番左

左官 花塗りはすつきり花のさくわんまで口ずさみぬることおしぞ思ふ 左 物言ふこともいさ白壁の方をのみ言い散らしたる、花の歌とも覚えぬ業なり。誠に似合ひたる風俗、勿体に現れ聞こゆ。……右の可為勝〔後撰夷曲集〕左官 田楽を炙る左官の壁にこそ山椒味噌をもこてに塗るらめ〔銀葉夷歌集〕寄次板恋 野根板の薄き情もあるならば泪の雨の漏るを止めん〔人倫訓蒙図彙〕左官 壁塗なり。燕の巢を作るを見て塗り始めしとなり。看板に炭櫃を出す。左官といふは出所考へず。／ 屋柵葺 声高

くわめく者なり。檜皮、木けら、執葺あり。民家には草葺、数寄屋、萱葺師、伏見に住す。〔今様職人尽百人一首〕屋根方 屋根の裏に釘打つ音の拍子よく軒の木舞に板わ葺きつつ「さあ、飯に行かふは。なんと六兵衛、南と出よふか」「このごろは土手が水嵩だ。行かれまい」「板を遣ろふかな」／ 左官師 大方の苜を踏み分け土捏ねの饅塗る腕の朝は冷たし「後に飲もつぞ」「お

お、苜木も靡くぞ。これから腰塗にかかろうは。伝兵衛、苜が少ない」「ちと持つて来ませうか」「職人尽発句合 壁塗 練り土や葺たばしる饅の上に 饅の上に葺たはしるは美朝將軍の詠に似てゆゆしき左官が手際なり。「ひとりぬるとは鳥さしのなき時のことか」／ 檜皮司 行く雁を屋根で見送る別れかな 何がしの院の屋根葺きもて雁の別れを見送りたる風情、あはれなるものか。〔職人尽狂歌合〕 壁塗・檜皮葺 花あれば知らぬ門も入り仕事より壁塗の見るに手間どる 谷多き家根より花の吉野山人で葺いたる春の日はだし 左大方よろし。ただ結句の拙きを念なき心地し侍る。右、四の句おかしげに聞こゆ。仍為勝。／ 壁塗

に仄めかすにか聞き分きがたし。右、屋の上にも谷といふあれば、吹き下ろしたるなど続けられし、巧みなり。勝ちて侍るべし。〔江戸職人歌合〕二十番 屋根葺・左官 月影の洩るるばかりに板屋根の軒端を少し葺き残さばや 中塗りに闇を残して屋根裏の漆喰白き秋の夜の月 右不難申。左申云、白き青きなどは詠まぬことのやうに申す人侍り。いかが。判云、左方の人、白きを難じ申さるると云々。さるは八雲御抄に、定家卿、今時の哥はみな白き青きにて侍り、と宣へりしよし見えたり。さやうのことを悪し

く心得て、詠むまじきものやうに思ふ人も侍るにや。白き青きは、上手の詞めづらかに心をかしく詠み出る具にて侍るなるを、させる節もなき哥にも、白き青きと詠むがその頃のこと侍りけるを惜みてこそ、さも宣ひけめ。かくて近代いとしも詠まぬことなれば、ただ今詠まんには、取り返しめづらう侍るべし。左、軒端を少し葺き残さばやと言へるも情深くは侍れど、右、閤を残りてと言ひ、漆喰白きと言へる、いとをかしうこそ侍れ。勝ち侍るべし。相見ても物言ふことの難ければ口に含みし釘も恨めしかねごとによも等閑は荒壁の裏を返し偽りぞ憂き。右方不難申。左方申云、右哥頗感心。判云、左歌、屋根葺の竹針を口に含むことは、屋根に登りてのことに侍べし。さる屋の上より物語せむは頗る頭露なるべきを、卒尔にも思ひ寄られて侍るかな。右哥、左方感じ申すと云々。その意に任せ勝と定め侍るべし。(今様職人尽歌合) 壁塗 古壁のいたづら書は削りても塗り隠されず立つ浮名かな ……右の樂書は山水天狗のしこ山などどのしどけなき業にはあらで、何がしくれがし一心命と忍び合ふ中を顕証に書き散らされしねたさ言はん方なく、削りての塗り隠されぬと歎きたる詞、その職に叶ひ、小手のききたる上手なれば、壁塗の入札多き中にも、この歌一番の落札と思はる。但し初の五文字の古といふ字、腋壁のといたされなば、白土の光も添ひて玄関前の浮名いよく分明なるべし。「例の髯売来たれり。いざ破子開かまし」 生壁の隔てを我と拵へてぬることかたき中となりけり ……右の生壁も、耳あらば聞き馴れたりとや申べからん。左右同じほどのことなるべし。 黒壁に塗らぬ壁にも映るごと目先に見ゆる妹が面影 ぬるまでの下地は出来て待つ夜半のこまいとまでは思はれぬかな 塗り上ぐる蔵の戸前のひと口は初瀬の花の観音開き 思ひつつ妹を見んとてぬるうちの壁てふものを頼みにはしつ 照り渡る今宵の月の白壁に拭ひてとらむ雲のむら立 夜桜にまたも客ある家桜壁をぬる間もなき花のころ 温くとも中々ならじ独寝の袖の乾かぬかへの怨みにつ 侍つ人をむなしく今宵帰し壁ぬる約束はかねてしたれど 塵はみな土に混りてぬるもよし壁にも交はず枕嬉しも づれなさよおくりしふみを返し壁ぬるとも言はぬ君は恨めし 塗り上げて褒めらるるより土なぶり叱る昔の親をこそ思へ によそ目には浮名の立つも白壁のこてさし入れてぬる夜嬉しき 白壁と見惚るる妹が厚化粧我は思ひの上塗りぞする 遣る文を荒土と投げ返す妹に顔さへ汚されにけり ぬる人も今宵ばかりは壁土の月の首とて眺めつるかな うはべのみ薄く見せても恋中を裏まで二人ぬるは嬉しき これほどに思ふ心を白壁に耳はあれども妹は聞こえぬ 人知れず契りしことの洩れつるは我がぬる壁に耳ありけん むつごとを洩らさじものと木耳の耳ある壁を塗り隠しけり (近世職人尽絵詞) 市中に蔵を建つるもの、荒打といふはあり。この日人夫に酒多く飲ませたる蔵は、人夫ども土投ぐる力を用ひて、蔵の鉢巻といふあたり土多く付く。すべて蔵に火の入るは鉢巻より入る、とある左官の申しさ。土掘る事陳々たり、土投ぐる事薨々たり、と大雅に見えしも、事を楽しみ功を勤むることならし。今日日は日和よくて、土は厚く付きて候」 銀葉夷歌集、寄次板恋、野柵板の薄き情もあるならば涙の雨の漏るを止めん 津の国伯水が歌なり。野柵板は土佐の安喜郡に野柵山といふ十里ばかりの大山あり。野柵板を出すと長元記に見ゆ。昔月事になりし女、山にありて折ぎたる板を月待といひて屋根下地とし、棧の竹を藤蓆にて巻きしなどありしが、今は稀なり。「虎狼よりの漏殿が怖く候」「この葺足の長さにては五六年も保つべく」(略画職人尽) 葺蒲さす軒を家根屋が葺き換へて板の赤みも匂はせにけり 楽書の鳥の跡さへ厭ふめり左官が塗りし白壁の雪 (宝船桂帆柱) 左官 金持

となる下地よき壁なれば左官も鏝を効かしてや塗る。「これから砂摺大直した」／家根屋 精出して家業で厚き屋根板を富貴自在なる道ぞ楽しき「閨屋には生反が付き物だ」〔難波職人歌合〕十三番右 左官 いで我は今日は手業を翹はまし月見るために夜を明かすべく 左の方人云、月見に眠たくあらせじと思ふは誰なればとて同じことなるを、いかが。右方答、誰もしか思ふことなればこそ、翹ひて屋寝せんとは云ふなりけれ。判に云、……また左の歌の難論に、右の方より答えられたること、作者の心にはなほあかず口惜しかるべし。そのゆゑは、昔人の戯れに夢を壁と言へりしより、ともにぬるものなればなりといふこと、有賀長伯が七部書などにも見えたり。さればこの歌は、月のために寝ることを思ひて我が手業を今日は翹はむと云はれたるに、いみじう月をめつる心籠りてあはれ深し。この番はともにとくめでたければ、持とこそ言はましか。

【本文】

二番

ふるさとのかへのくつれの月影は
ぬる夜なくてそみるへかりける
月のもる軒はのきりのうすひはた
ふきもとをさぬ秋のかせかな

左、かへのくつれ、といひてぬる夜なく月みる、
いとやさし。右は、霧のうすひはたふき、とは
つゝきたれと、風を本にいひて月をもて

なす心すくなし。仍左勝にこそ。
我そてのひるよもしらぬなまかへの
よりそふ人のなきもうらめし
軒つけをまつふきそむるひはた屋の
またむねあはぬ恋もするかな

注解『七十一番職人歌合』稿(一)

ふるさと―【類】故郷 かへ―【類】壁 月影―【尊】月かけ
ぬる夜―【類】ぬるよ
軒は―【類】軒端 うすひはた―【尊】うすひわた【類】薄ひ
はた
秋―【尊】秋 かせ―【類】風
かへのくつれ―【類】壁の崩 ぬる夜―【類】ぬるよ
うすひはた―【類】薄ひはた
つゝきたれと―【類】続きたれとも
すくなし―【類】少し
我そて―【類】我袖
まつ―【明】類 先 ひはた屋―【類】ひはたや

左、なまかへのひるよなきに、よりそひ

かたき、といふ、いと興あり。右、軒つけを

ふきはしめて、またむねあはぬ、とよめる

下の句、歌さますこしまさるへくや。

◇

かへぬり

やれくうはうよ、

いへにてこて

猶とりてこ。

かへの大く

まいりて候。

した地とく

し候はくや。

ひはたふき

此むな

かはらか

をそき。



◇

なまかへー「類」なま壁

ふきはしめてー「類」晝はしめて

下の句ー「類」下句

かへぬりー「巨」類「壁塗」忠二番かへぬり 壁塗

うはうー「類」うはら

かへー「忠」かへ

した地ー「白」忠「したち」明「したち

し候はくやー「白」し候や「明」類「して候はくや

ひはたふきー「白」類「檜皮晝」忠「檜皮晝

此「類」この

【語注】

◎壁塗・檜皮晝はともに建築技術者。壁塗は中世以降「左官」とも呼ばれた。

◎ふるさとの…… 『飛鳥井雅康 職人歌』五番右に同じ。

◎ふるさとのかへのくつれ「古里」は、かつて住んでいた家。今は荒れて壁が崩れているのである。古里と壊れた壁の取り合わせは、三十七番左、豆腐売の月の歌にも「古里は壁の途絶えに奈良豆腐……」とある。「再昌草」に収める「向かひ見し壁は破れて故郷に本の垣根を繕ひぞする」という道賢法師の歌も同様。

◎ぬる夜なくてそ 壁を「塗る」に「寝る」を掛ける。月影の洩れて来る壁の崩れをあえて塗り直さないで、夜中寝ないで月を見るべきだ、というのである。「宿りする埴生の小屋の壁隔てぬるがうちだに見る夢もなし」(新撰和歌六帖、五)のように、歌の世界では「壁を塗る」―「寝る」の連想は一般的で、「まどろまぬ壁にも人を見つるかな正しからなん春の夜の夢へ駿河」(後撰、九、恋)のように、「壁」という語が「夢」を意味することもあった。その限りでこの壁塗の歌は、伝統的な詠みぶりであるといえる。ただし、「寝る夜なし(少なし)」は、多く恋の歌で、「恋人と共寝する夜がない」、または「恋の思いに悶々として幾夜も眠ることができない」の意で用いられる言葉であるが、壁塗の歌では、美しい月影を夜通し見ることに言う。当歌合では、四十五番右、鞍細工の恋の歌「いかにしてまつ人口に乗りぬらん白骨鞍のぬる夜なき身に」のように、恋の歌に用いた例もあるが、三番右、塗師の月の歌「眺むとぬる夜もなきに……村雲の月」、十一番右、浦人の月の歌「塩釜のぬる夜少なく月を見るかな」は、月の歌。十二番本「東北院職人歌合」八番左、塗師の月の歌「我が宿の烏帽子絹をいかにせんぬる夜少なき月のころかな」も同様。

◎月のもる軒はのきりのうすひはた「軒端の霧」―「霧の薄」―「薄檜皮」と続く。「軒端の霧」はほとんど歌に詠まれた例がない。「薄檜皮」については、『家屋雑考』三に「厚檜皮のよきはもとよりながら、厚からずして密なるをも、薄檜皮とて賞翫することなり」として、『太平記』二十七の「都にはさしも気高かりし薄檜皮の屋形の」という用例を引いているが、こゝは、「月の洩る」とあるから、手を抜いた造作で、それが古くなって痛んでいるのであろうか。未考。

◎ふきもとをさぬ秋のかせかな「ふき」に檜皮を「葺き」と風が「吹き」とを掛ける。前項と矛盾するが、檜皮を巧みに葺いているので、風が吹き通すことがない、というのであろうか。しかし、秋風が吹き通さない、というの

は歌として通例でない。あるいは、「葺きも徹さぬ」で、檜皮を完全に葺き終わっていないので、秋風が吹き込むという意か。未考。

◎風を本にいひて月をもてなす心すくなし 「本」は中心となるテーマ。「もてなす」は大切に扱うこと。風を中心に詠んでいて、題である月を疎かにしている。

◎我そてのひるよもしらぬ 恋の思いに泣き濡れていつ袖が乾くとも知らない。生壁が乾かないことを掛ける。

◎なまかへ 生乾きの壁。

◎よりそふ人のなき 生乾きの壁には寄り添う人はいない。自分はまるで、その生壁でもあるかのように寄り添ってくれる人ともいない、の意。

◎軒つけ 檜皮葺、柿葺などの屋根の軒先の部分。屋根は下から上へ順に葺いて行く。

◎またむねあはぬ恋もするかな 「陸奥の狭布けふの狭布さぬのほど狭まみまだ胸合はぬ恋もするかな」(古今六帖、五、綿綾)を引く。この歌以来、「錦木は立てながらこそ朽ちにけれ狭布さぬの細布こぬ胸合はじとやへ能因法師」(後拾遺十一、恋)、「言へばえに焦がるる胸の合はでのみ思ひ暮らせる狭布さぬの細布こぬ隆教」(新千載、十三、恋)、「世とともに胸合ひがたき我が恋の類ひもつらき狭布さぬの細布こぬ伏見院」(新拾遺、十二、恋)と、「胸合はぬ」という言葉は「狭布さぬの細布こぬ(狭布)」という言葉とともに用いられて来た。いずれも、着物の左右の胸が合わないことを、男女の心が通じ合わないことに言い掛けている。檜皮葺の歌は、これを真似て、檜皮を葺き初めたばかりで、まだ棟の部分には至らず、棟が合わさっていないことをもって男女のことに言い掛けたのである。

◎うはうよ 尊経閣本「うはうよ」、類従本「うはらよ」。白石本、忠寄本、明暦板本は「うはうよ」と読めるが、「うはらよ」とも読めなくはない。「うはう」は「うはら」の誤写か。「うは」は「姥」で老女、「ら」は「我ら」の「ら」(一番左、番匠の話し言葉参照)と同じく、人を表す名詞(代名詞)について謙遜や相手に対する蔑視、愛情などの気持ちを添える接尾語と考えたい。壁塗が自分の妻に呼びかけている言葉であろう。

◎かへの大く 「大工」は建築、造船などに従事する技術集団の長(一番語注参照)。「壁塗」と言わずに「壁の大

工」と言っているところに、この職人のプライドが感じられる。

◎した地 壁下地のことで、細い割竹や木を格子状に編んで、それに縄を絡ませたり、薄を差し込んだりした、壁の骨組。

◎し候はゞや 「しころはばや」と読むのであろう。明暦板本、類従本の「して候はゞや」は誤写か。なお、終助詞「ばや」は、室町時代には口語としてはほとんど用いられなくなったとされる（此島正年『国語助詞の研究』）が、当歌合の話し言葉ではこの他、「今ちと押さばや」（三番左、研）、「相撲の節に召さればや」（六十三番右、相撲取）がある。

◎此むなかはらかをそぎ 檜皮葺きや柿葺きの棟は普通、板で箱形に造るか、瓦で葺くかする。ここは後者で、棟瓦が届くのが遅い、と言っているのであろう。

【絵】

壁塗は、折烏帽子、直垂袴姿に帯刀、右手に鋺、左手に鋺板を持つ。前に壁土を入れる曲物の桶。

檜皮葺は、同じく折烏帽子、直垂姿で木槌を持つ。前に檜皮の束、金槌と竹釘の入った箱。白石本は箱の中身は描き落とし、忠寄本、類従本は、釘とはやや認めがたい絵。

【参考】

○この間参らぬ内に結構に御普請がいできでござる。御普請を存じたらば、参つて壁下地なりとも致さうものを。

（虎明本狂言、八句連歌）

○壁はその材料に関していえば、細竹をたいへん上手に編んだ上にこねた粘土を塗ってできている。柱と柱の間にある空間は、細かく切つて煮た藁のような粘着するものを細かな粘土に混ぜ、それをたくさん塗りして、甚だ見事にできている上に細かな石炭を塗る。左官はそれで壁の面がすべて継ぎ目のあともなく、鏡のようにただ一つと思われるほど見事に最後の仕上げをする。

○われらの屋根は瓦で葺かれる。日本のは、大部分が板、藁または竹で（葺かれる）。

三番 研 塗師

【職人尽】

〔五番本 東北院職人歌合〕 三番左 刀磨

我やとのとみつにやとる月かけのあやしやいかにさひて見ゆらん
君ゆへにきもくころもときはてゝ我身一はきえなかりける

月

……左可勝と申。

恋

左、さしたる難なし。……持にや。

〔十二番本 東北院職人歌合〕 四番左 刀磨

わか宿の砥水にやとる月影のあやしやいかにさひてみゆらん

左右いつれもたより有て、おもひわきかたく侍れ共……右を勝とす。

君ゆゑにきもく心もときはてゝわか身はかりそきえなかりける

左、はしめより終まであまりにさせる事なくてきく所なし。……猶右を為勝。

〔同〕 八番左 塗師

わかやとのゑほうしきぬをいかにせんぬる夜すくなき月のころかな

左、ぬる夜すくなき心、さもときこゆるに、胸腰句かきあはずして、たゝの直垂に薄色のさしぬきなどをきたら
んやうにおほえ侍り。……持と申へし。

露とのみぬりやる袖のなみたこそつちむろしてもほされさりけれ

左 露とのみぬりやる袖も、まことに思ひあまれる心をさきたて、詞つかひ詮をあらはせり。……仍左勝とす。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 七番左 ときや

いかゝせむとかすもつるきたちかたなみねなる月のさひのころかな

〔同〕 八番左 ぬしや

なかむとてぬるよもなきにあらうるしはけめもあはぬむら雲の月

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 四番左 刀磨 研ぎ上げて大和物とも見るままに焼刃はなほもたえまなりけり／八番左 塗師色につく人の心の花漆あと剥げやすきものと知りぬる〔吾吟我集〕 寄剃刀恋 人心荒祇に当つる剃刀のあふことかたく濡るる袖かな〔古今夷曲集〕 かたひ砥をこなたかなたに研ぎかけて合はずは何を剃刀にせん〔訓蒙図彙〕 漆匠 ぬし、髻工、同〔長崎一見 職人一首〕 三番左 磨屋 春の日の長きはいかに御刀淋しき伽や花を詠めん 左の作意、春の日の長刀に磨きくたびれ、せめて花をなりとも詠めんといふやうにて、本意がなくこそ侍れ。例へば、散る花には心も乱れ焼刃になるらん、などありたきことなれ。やうく歌の錆を落とされたるばかりにて、磨きかつてあたらす。……〔銀葉夷歌集〕 寄漆恋 恋しきは互ひに負けじ一人づつひとりぬる身は漆なりとも〔人倫訓蒙図彙〕 砥屋 諸国より出る。山城の高尾、鳴滝砥は剃刀砥の名物なり。眼伸札剣を作り、心の欲する所に従わずとて捨つる。その子尾毛石にて磨らしめしより研ぐとなり。油小路、押小路を始め所々にあり。大坂は横堀にあり。／塗物師 一切塗色品々これを尽くす。但し仏塗師、鞘塗師、別にあり。〔今様職人尽百人一首〕 研屋 この錆はやきも研ぎあへず荒砥掛けあまたの砥石掛けてみるく。〔鉄にきつふ鈍りがある〕「随分研ぎて見ませう」「刃の毀れたを直しにやらしやれ」／塗師屋 腕と鉢安手間かけて塗り上げんとふさみはかけて合はぬ継物「算用ししいれは大方に損がいく。手間をちと了簡さつしやれ」「つがもないこと、職人は定めを通り」〔職人尽発句合〕 刀研 霜の剣氷のごとく研ぎすまし 研ぎすましと鋭ふ言ひ詰めしは、この職に任せし仕立なるべし。／塗師 誰が閨の撫物にせむ塗火桶 誰が閨の撫物にといへる塗師が心おかし。恋しき瀬々の撫物にせむ、といへる恋葉の古歌をや思ふ。「濡れて乾かぬ沖の石よ」〔職人尽狂歌合〕 塗師 花を見る塗師は漆の吉野から初瀬参りもはげ序なり 左、漆の出る吉野より初瀬と心ざしたるを、はげ序と続けられし。この職にてはさも待るべし。……左増りて侍るべし。／塗師 あかす見る吉野の山の花漆やまと歌にもかき合はせなん 左、花漆匂ひ侍れど、なほ右の破籠造り……勝と申べし。〔宝船桂帆柱〕 塗師 生業も堅地にすればいつまでも大丈夫なる塗師の身代「木固、木屎、錆、きりこ、中塗り、上塗り、仕立が肝心じや」〔難波職人歌合〕 十七番左 研屋 益荒男の研ぐとはすれど恋といふ心の錆もある世なりけり 右の方人云、心を研ぐといふことは万葉などにも詠めれど、心の錆と云へる例ありや、いかが。左方答、研ぐと云

へれば錆もなくてはあるべからざるをや。判に云、左の歌、万葉に、益荒男と思へる我も、と詠みし面影ありて、身をかこちたる心、浅からず聞こゆ。右の歌、……なほこよなう勝りたり。／二十五番左、塗師屋、願はくは漆のごとく睦れ合ひて離れぬ中となるよしもがな。右の方人云、心明らかにて、別に申す旨はなけれど、袋法師に柴垣など云ふ絵巻どもを見るらん心地して、いと見苦し。左方答、恋の歌は心の深きを旨とこそすれ。判に云、左の歌、恋の心は切なれども、余りに詞の混けたるより、何とかや右の方人の云はるる面影なきにしもあらぬぞかし。右の歌、……とにかくこよなう勝りたり。

【本文】

三番

いかにせむとかすもいらぬつるきたち
みねなる月のさひのころかな

なかむとてぬる夜もなきにあらうるし
はけめもあはぬむらくもの月

左哥、五文字かなはすきこゆ。峯のあひしらひ
あらまほしくや。右は、あらうるしのはけめあ

はぬを、村雲にたとへたる歎。左右とも
さしてもきこえず。持にて侍へし。

いつまてかはまくりはなるこかたなの
あふへき事のかなはさるらむ

しほれともあふらかちなるふるうるし
ひることもなきそてをみせはや

左右ともに心こと葉きゝて面白く
きこゆ。よき持にこそ侍るめれ。

いかにせむ―【類】いかにせん たち―【類】太刀

みね―【類】峯 かな―【類】哉

ぬる夜―【類】ぬるよ あらうるし―【類】あら漆

むらくも―【類】村雲

あらうるし―【類】あら漆

左右とも―【尊】「白」「忠」「明」【類】左右ともに

きこえず―【類】聞えず

はまくりは―【類】蛤刃

事―【類】こと らむ―【類】覧

あふらかち―【類】油かち ふるうるし―【類】古うるし

そて―【類】袖 みせはや―【尊】見せはや

とき

さきかをもき。

今ちとをさはや。

ぬしにとひ申さん。

はゝやさは

いかに。手を

きるぞ。

ぬし

よげに候。

きかきの

うるしげに候。

今すこし

火とるへきか。

【語注】

◎研と塗師とが番になつてゐるのは、塗師が下地を塗るのに砥粉（砥石の粉）を用いるからか。因みに、塗師は下地に、砥粉を水で練り生漆（後述）を混ぜたものを用いるが、これを「錆漆」または、単に「錆」といふ。

◎いかにせむ…… 『飛鳥井雅康 職人歌』七番左は、上句「いかにせむとかすもつるきたちかたな」。

◎とかすもいらぬ 未考。初句の「いかにせむ」および末句の「さび残るかな」から推して、研の技術が未熟で、あるいは刀剣の質、手入れが悪くて、十分に研ぎ上がらないことをいふのであろう。

◎みねなる月 刀の「峰」に山の「峰」を掛ける。下に「寂び残るかな」とあるから、西の峰である。



とき―「白」類「研」忠

三番

をもき―「白」忠「明」類おもき

ちと―「白」忠「類」少 をさはや―「白」忠おきはや

とひ申さん―「白」忠問申さん

はゝやさは―「白」ナシ「忠」はゝはや（書入れ）

ぬし―「白」類「塗土」忠「塗土」

今―「白」忠「類」いま

◎さひのこる 刀劍が「錆び」に、月が「寂び」を掛ける。『東北院職人歌合』の「我が宿の砥水に宿る月影のあやしやかにさびて見ゆらん」と同想。「寂ぶ」は、勢いが衰えて寂しげな趣になること。「住吉の岸の松風音さえて寂びたる夜半の月の影かな〈源季広〉」(万代和歌集、四、秋)、「露こほる枯野の原の霜の上に寂びたる夜半の月を見るかな〈忠良〉」(夫木和歌抄、十六、冬)などの例がある。本歌合にもこの他、「秋や深き月の光もさび烏帽子」(十三番左、烏帽子折の月の歌)、「さびてぞ見ゆる秋の夜の月」(五十六番左、金掘の月の歌)とある。

◎なかむとて…… 『飛鳥井雅康 職人歌』八番左に同じ。

◎なかむ 月を「眺む」と、漆塗り関係の何かを掛けるか。未考。

◎ぬる夜もなきに 「寝る」に、漆を「塗る」を掛ける。十二番本『東北院職人歌合』八番左、塗師の月の歌と同想。月を眺めるとて、夜も寝ないで、漆を塗ることもしないで、「寝る」と、壁を「塗る」との掛詞は一般の和歌で珍しくないが、漆を「塗る」との掛詞は異例。ただし当歌合では、十七番左、挽入売の月の歌「糴漆ぬる夜はいかに」、同、恋の歌「売り挽入ぬるかとすれば」、四十五番左、鞘巻切の恋の歌「破れ簀子ぬる人の来ぬ」、同右、鞍細工の恋の歌「白骨鞍のぬる夜なき身に」の例がある。(一番語注参照)

◎あらうるし 「荒漆」で組成の悪い漆の意か。あるいは、恋の歌に「古漆」とあるのと対照的に「新漆」で新しい漆、または早い時期に採れた漆の意か。未考。いずれにしても次に「刷毛目も合はぬ」とあるから、質の悪い漆であろう。因みに、松田権六『うるしの話』によると、漆の採集の期間は六月頃から十一月頃までで、早い時期ほど水分が多い。七月中旬から八月いっぱいくらいまでに最も良質の漆が採れ、九月に入ると水分も次第に少なくなり下地塗り専用の漆となり、十月以降になると濃度を増して、粘っこいどろどろした漆となり、絵を描くには適さない、という。

◎はけめもあはぬむらくもの月 「刷毛目」は、刷毛で塗った跡。「刷毛目も合はぬ」とは、刷毛目が残って、塗りにむらが出来たことをいうのであろう。そのような村雲の月だ、というのである。月に村雲がかかっている、月のありの通りだけ白っぽくなっていることをいう。十七番左、挽入売の月の歌にも、「糴漆ぬる夜はいかに割れ挽入刷毛目

は白き村雲の月」とある。

◎五文字かなはずきこゆ 「五文字」は歌の初句。すなわち、ここでは「いかにせむ」の句。「叶はず」は、調和がとれていないこと。次の「峯のあひしらひあらまほしくや」という評から推して、具体的には、初句が必然性がなく、全体から浮き上がった言葉だということであろう。また、「いかにせむ……峯なる月の寂び残るかな」で、月が入り残るのを厭うているように聞こえるので、月の歌としてはよろしくない、という意味もあるかもしれない。

◎峯のあひしらひ 「あひしらひ」は、応答すること、ここでは「峯」に関連のある言葉、すなわち縁語の類。

◎はまくりは 『武家名目抄』によれば、「蛤刃とは鎬より刃までの間を方にかかずして膨らみあるをいふ」とある。すなわち、蛤形に膨らんだ刃の種類のことであるが、ここでは、なまくらになつて、丸みを帯びた刃をいうのはなかるうか。『猿蓑』梅若菜の巻に「身は濡れ紙の取り所なき／小刀の蛤刃なる細工箱へ半残」／棚に火燈す大年の夜」という句があつて、この「蛤刃」がその意味ではないかと思われる。そう考えると、「いつまでか……合ふべきことの叶はざるらむ」という言葉によく合う。参考までに『露伴評釈芭蕉七部集』から当該句の評釈を挙げておく。「蛤刃は鋭からで丸みを持ちたる刃形をいふ、切味甚だよろしからず、素人細工の用ゐるところ多くは是也。されば此句即體の句にて、何を為しても取所なしといふさまなりと解する人多し。別解ありて曰く、蛤刃とあり細工箱とあり、蛤刃の小刀は皮の毛をこそげ去るに用ゐるなり。鋭き小刀は皮を傷つくればにて、前句をいと賤しきものとして皮革の細工する者を附けたりと。鑿説ならむ。皮革を治むる者果して蛤刃の小刀を用ゐるや否や、詳しく知らずと雖も、必ずしも然らざるべしと思はる。又別解あり。曰く、職人尽歌合に、いつまでかはまぐり刃なる小刀のあふべきことのかなはざるらむ。此歌を裁入れて前三句の恋を、こゝに離れて、職人の態を云へりと。細工箱といふ詞あれば、素人細工と云はんよりは此解や、宜しかるべし。作者半残山岸重左衛門は藤堂藩士にして芭蕉の姉婿、当時の世に行はれたる職人尽歌合などに疎かるべき人にもあらず。又これより少し後に大場寥和の俳諧職人尽あり、職人尽の世にもて囃されしこと知るべし。蛤刃のあはぬといふは、すべて刃を表裏より研ぎつくるをあはずといふより、蛤刃の鈍く円なれば、あはぬとは云ふなり。剃刀を合はず、寐た刃をあはず、合せ砥、などいふ辞を考へて知るべ

し。扱又蛤の貝は此の一片と他の一片とは甚だ合ひ難きもの也。濡紙、蛤刃、取所、合所無し。理路は不明なれど、附く味あり。曲斎の如く強ひて糊細工とするにも当らざらん歟。」

◎あふへき事のかなはさるらむ 刃物を研ぐことを「合はず」と言い、その結果切れ味がよくなることを「合ふ」と言う。刃が「合ふ」に、男女が「逢ふ」を掛ける。「蛤刃」がなまくらになった刃だとすれば、ここは、いくら研いでも刃が合わないように、いつまで恋しい人に逢うことが叶わないのであろうか、の意になる。

◎しほれとも 漆を漉すことをいうのであろう。漆は絵に見るように、漆漉し紙を用い、手で絞って不純物を取り除いた。「絞る」に袖を「絞る」を掛ける。

◎あふらかちなるふるうるし 「古漆」は使い古しの漆か。水分が蒸発して油分が多くなっているのであろう。油は、用途に応じて精製した漆（製漆）に顔料などとともに混ぜたものをいうか。未考。

◎ひることもなきそてをみせはや 漆が「干る」と袖が「干る」とをかける。古漆が乾かないように、絞っても絞っても涙で乾くこともない袖を見せたい。塗った漆が乾くのは、水分の蒸発によるのではなく、漆の成分の化学反応による。古い漆で、反応が十分に起こらないのであろう。「袖を見せはや」は、「朝ぼらけ置きつる霜の消えかへり暮待つほどの袖を見せばや」（新古今、十三、恋）のように、恋の歌でよく使われる表現。

◎さきかをもき。今ちとをさはや 刃先が十分に研ぎ上がらず、重く感じられる、もう少し、力を入れて研ごう、の意か。「をす」に、研ぐの意あるか、未考。

◎ぬしにとひ申さん 「主」は持ち主。「先が重き」ことに関して問おうというのか、あるいは、次の「刃早さはいかに」と問おうというのか、未考。

◎はゝやさはいかに 「刃早さ」は切れ味。「主に問ひ申さん」から続くのでなければ、自問の言葉か。あるいは、絵には描かれていないが、弟子に対して、「刃早さはいかに。手をきるぞ」と尋ね、注意しているのか。

◎手をきるぞ これも、自戒の言葉と取れなくもない。

◎よけに候 漉した漆の加減がよさそうだ、というのであろう。

◎きかきのうるし 「きかき」は、『名語記』八に、「木搔 これは染を木よりかきおろしたるままにて調せず」とあるが、漆の場合も搔き取ったばかりの新しい漆を「きかきの漆」と言ったのであろう。なお、「きかき」は「生搔」がよいのではないか。現代では、山で採集した天然の漆液を「荒味」といい、荒味のごみを濾過したままの漆液を「生漆」という。生漆は水分が多く、この水分を蒸発させることを「黒める」という。(松田権六『うるしの話』)

◎今すこし火とるへきか 「火取る」は、火に当てること。火に当てる漆の水分を蒸発させるのである。生搔の漆で、火の当て方が不十分であったのであろう。

【絵】

研は、折烏帽子直垂袴姿で、片肌脱ぎで刀を研ぐ。砥石の下にある支えは砥台(砥枕)。手前に大小の砥石三個、短刀と砥水を入れた水槽。

塗師は、同じく折烏帽子直垂袴姿で腕捲りをし、弟子とともに、漆漉し紙で漆を絞り漉している。その下に受け鉢。弟子は、剃髪、小袖袴姿で片肌脱ぎになって、右手に漆刷毛を持つ。手前に曲物の漆桶二個と皿状の器。この器は油、顔料などを入れたものか。二十七番左、時絵師の絵にも、同様の器が見える。明暦板本は、漆が垂れているのを受け鉢とを落とす。

【参考】

○ 水錆深むる忘れ井の底

これやこの研ぐ焼太刀の礪波川 宗砌

(顯証院会千句、一)

○ 刈り結ぶ草に鈍き鎌の刃

研ぐ太刀のとりの山の影さびて

(異体千句、四)

○ 日本ニトギト云テ、刀剣ヲトグ者カ、ヤガテ柄鞘ヲシイル、ゾ。

(史記抄、十八)

○ 身は錆太刀、さりととも一度、とげぞしようずらふ

(閑吟集)

○ さびしきものと人は知りぬる

夕暮に漆の桶に腰掛けて

(犬つくば集)

○ 合はすることにひちめきぞする

剃刀の砥台の下に溜まり水

(同)

○昔は花漆、今は年長け蠟色の、漆の罰も当たりたる、職の有様懺悔せよ。いでくさらば語り申さんと、恥しなから餓鬼道の、く、ぬしとなつて、青漆のごとくなる、淵に臨んで、漆合子に水を入れて、飲まんとすれば、ほどなく火焰と燃え上がつて、身は焼け漆となりたるぞやく。またある時は布に巻かれ捻木を入れて、ひた捻ぢに捻ぢ詰めらるればあら心漆刷毛の、化け損なはば、いかならんと、風呂の小陰に入りにつけり。塗籠他行といふことも、く、この時よりこそ始まりけれ。

○われらの(剃刀)は、硬い石の上で油を使って研ぐ。日本人は、柔かい石の上で、水を使って研ぐ。

(虎明本狂言、塗師)

○われらの食器は銀または錫製である。日本人のは、漆塗りの木製で、赤か、さもなくば黒い色をしている。

(日本寛書、七)

○この王国全体にゆきわたっている絵画に關係する一つの技術がある。それは漆を塗る技術である。それをわれわれがここ「日本」でウルシャル *Wuxar* と呼んでいるが、これは漆 *wuxy* という語から作られたものである。漆とはある種の樹からとる樹脂ゴキヤのワニスのことである。この樹はまたシナ、カウチ〔交趾〕、カンボージャ、およびシアン〔シャム〕にもある。しかし、これらすべての民族のなかでも日本人はこの技術に卓越していて、きわめて器用なので、この漆でいろいろな物を作るが、それは光り輝く滑らかな革でできているかのように見える。この技術は王国全土に広くゆきわたっている。なぜなら、すべての食器ロイヤ、たとへば椀、食台メイザ〔膳〕、その他の器や裝飾具がこの漆で塗られているからであり、ひとりだけで食事をするのに使う食台や盆バンデーヤもそうなのである。この技術は、どんな水でも、たとえそれが沸騰していようと、これらの器や椀に注がれた場合にも、まるで釉薬をかけた陶土でできているかのように、何ら損することのないものに作りあげるのである。

(日本教会史、二一三)